

ヒラメ種苗生産

生き物の気持ちを考えること

正常



黒化



正常なヒラメ稚魚(上)と黒化したヒラメ稚魚(下)
体長45mm

〈課題〉

平成25年度の生産では、無眼側黒化が非常に高い割合で確認されました。

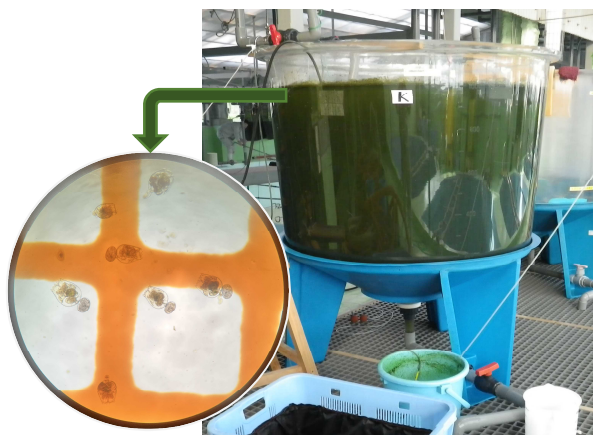
無眼側黒化のような体色異常は人の手で育てた魚に発生し、放流した際の標識となる一方、漁協での買取価格が低くなるといったデメリットがあります。

無眼側黒化の主な原因は栄養不足、悪い飼育環境からくるストレスと推測されるため、これを解消することを課題として生産を行いたいです。

〈対策〉

ヒラメ稚魚はもちろん、餌となるワムシの観察をしっかり行い、飼育環境を見直すことを続けた結果、平成26年度以降は正常魚を多く生産することができました。

生き物の気持ちを考えて、綺麗な環境で栄養満点の餌をお腹いっぱい与えて育てたことが生産の成功に繋がったと考えられます。今後も育成方法の見直しを継続して生産に尽力していきたいです。



ヒラメ稚魚の餌となるワムシ(丸抜きは顕微鏡図)

中間育成・放流

お世話になった方々へ



古和養魚場(浜田市)

平成25年度からヒラメの中間育成をお願いしている古和さんが、令和4年度の育成を最後に勇退されます。

高いヒラメの養殖技術を生かして、95%という中間育成生存率での育成を実現して下さいました。

古和さん、栽培業魚に沢山貢献していただきありがとうございました。



マダイ種苗生産



出荷前のマダイ稚魚 体長45mm

こまめな掃除

〈課題〉

平成23年度生産で脊椎骨の変形等の奇形魚が多く発生しました。

原因は、残餌や代謝物からできる油が水面に層状に溜まり、マダイ稚魚がうきぶくろを形成しようと水面で空気を取り込むのを阻害しているためでした。

〈対策〉

平成24年度からは対策として、油の層をこまめに回収したことで、奇形の発生が28%から5%まで減少しました。

放流効果把握のための標識

ヒラメ



ヒラメは鰭、マダイは鼻孔

ヒラメ放流の標識となるのは前述した無眼側黒化と有眼側胸鰭です。

胸鰭を標識とする場合には種苗2,000尾の鰭をハサミでカットした後、全県各地に放流を行っています。

マダイ



マダイ放流の標識は眼の前側に開いた鼻孔と呼ばれる鼻の穴です。

天然物のマダイでは鼻孔が片側に2つ並んでいます、人工種苗では並んだ2つの穴がくつき1つの穴になっています。

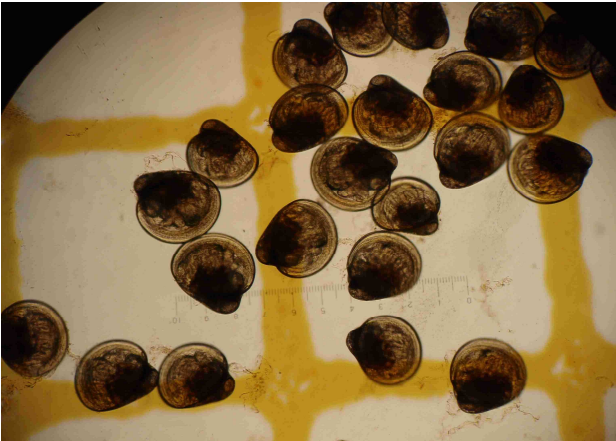
放流効果調査では、鼻孔が1つのものは放流魚として数えています。

関係者の努力が実を結びますように。
大きく育て！



イワガキ種苗生産

日々の観察と準備



イワガキ幼生 殻長250~300 μ m(日齢20)

〈幼生の観察〉

イワガキ種苗生産の成否はコレクターに種苗が確実に付着してくれるかどうかで決まります。現場では、成長が早く動きが活発な幼生は付着しやすい傾向がみられるため、毎日の観察により幼生の状態を見極められるかが重要になります。

特に、飼育水には気を使っており、水替えを毎日行うことはもちろん、種苗の状態が悪いと判断すれば随時清潔な水槽に移し替えています。

〈培養水の準備〉

イワガキ幼生の餌は植物プランクトンなので、良質なものを与えるためにセンターでは自家培養を行っています。

これに使用する培養水は海水を高温で滅菌して作成しますが、5Lのフラスコで数百本以上が必要なため、作成にはかなりの時間を要します。

培養水づくりが間に合わない際には塩素殺菌で代用することもあります。培養水づくりは餌づくりと言えるため、担当者としては時間と手間がかかっても種苗にとってやさしい培養水を使いたいところです。



餌となる植物プランクトン



コレクターに付着したイワガキ稚貝(日齢35)

〈心がけ〉

大切なことは、毎日の観察と培養水づくりなど良いものをつくるための準備です。

イワガキ養殖漁業者が満足できる種苗を提供することが私たちの役目です。



海面いかだで飼育中のイワガキ稚貝(日齢90)